エジコに関する文化人類学的研究*

宮城県のエジコ使用地域における調査

須 江 ひ ろ 子

I. は し が き

1955 年及び 1956 年に調査を行つた長野縣西筑摩郡開田村西野では、エジコを「コシキ」又は「イズミ」と稱し、子供が生れると翌日、藁で編んで、生後 4 日目に子供を入れる。明治時代末期から大正初期までは子供が 3・4 才になるまで使用していたが、昭和に入つてからは歩きはじめまでの 1・2 年間使用するようになった。「エジコ」に入っている子供は陽當りの悪い「ネマ」か「ダイドコロ」に置かれるので透きとおるように白い肌をしている。

人手がかゝらず、比較的安全で保温力もある點が、育児用具としてのエジコの利點であると考えられているが、30 才前後の母親の中には歩きはじめが遅れる、子供の體に悪いという理由で使用しない者が出て來ている。ところが、エジコを使わない方が良いと考えている若い母親でも、分家で土地がなく、夫を出稼に出し、子供を見してくれる老人がいない家では止むを得ず使用している例もあつた。

これらのことからエジコの分布する地域の中でエジコ使用を維持して來た諸條件、エジコ使用が放棄されて行く實態およびその要因を明らかにしたいと考えるにいたつた。

1957 年 7 月岩手縣江刺町梁川における調査實習で、4 例の面接調査によつてエジコに関する調査項目の検討を行つた。1957 年 8 月、東北大學醫學部小兒科佐野教授の御好意で宮城縣宮崎町においてエジコ使用の實態を調査する機會を與えられた。

宮城縣では縣衛生部と東北大學醫學部小兒科の協力によつて、縣下に母子衛生指導模範地區を設け、1948 年以降、毎年乳幼兒の檢診を行い、母子衛生、離乳の方法、くる病の早期治療等に関する指導が續けられ、種々の成果が擧げられつゝある。必ずしもエジコ使用がくる病の罹患を高めているとは考えられていないが、エジコを使用することにより乳幼兒の運動を制限し、陽當りの悪い部屋に放置するような事態が生じ、發育に悪影響をおよぼすという理由から、エジコ使用を廢止する方向に指導が行われている。

筆者は宮城縣加美郡宮崎町における乳幼兒檢診に参加させていただき、0 才兒及び 1 才兒の母親 295 人に面接調査を行つた。こゝに報告するのはその結果である。

* 本稿は、1957 年 10 月の第 12 回日本人類學會・日本民族學協會連合大會における報告に加筆、訂正したものである。長野縣開田村の調査を御指導いただいた泉靖一助教授、AKIRA and JOANNE HIRABAYASHI、大給近達の諸氏、岩手縣江刺町の調査で御指導下さつた JOHN C. PELZEL 教授、宮城縣宮崎町の調査の便宜と種々の御教示をお與え下さつた東北大學醫學部小兒科教室佐野保教授、廣岡豐博士、宮城縣廳公衆衛生課島貫茂母子係長その他調査に御協力下さつた方々、および本稿の作成に當つて終始御指導いただいた祖父江孝男氏に心より御禮申し上げます。

II. 宮 城 縣 宮 崎 町 の 概 況

宮崎町は宮城県西北部にあり、奥羽山脈を隔てて山形縣と境している。昭和 29 年加美郡宮崎村賀美石村が合併し町制を施行、宮崎町となつた。1957 年現在、總戸數 1,527 戸、總人口 10,236 人、土地の 81.7% は山村原野、8.9% が耕地、975 戸が農林業に従事している。⁽³⁾

生業によつて宮崎町を A, B, C の 3 地區に分ける事が出来る。すなわち第 1 圖において、舊賀美石村であつた A 地區は水田地帯、宮崎町の中心部をなす B 地區はマチと呼ばれ半農半商ならびに通勤者が居住し、最も縣境に近い地區は山村畑作地帯である。A 地區及び B 地區の次三男のほとんどは仙台方面へ出て働くが、C 地區では次三男も町に残り炭焼きや山仕事に従事する者が多い。

宮崎町におけるエジコ⁽⁴⁾の使用率は 1954 年 56.8%、1955 年 47.3% で、宮城県下でも特に高率を示して來ている。

第 1 圖 宮崎町略圖(右) および町内エジコ分布圖(左)

III. 調 査 對 象

1957 年 8 月 1 日現在宮崎町に在住する 0 才児及び 1 才児 345 人中、乳幼児検診を受けた者は 305 人、筆者が面接調査を行つたのはそのうちの 295 人に關してであつた。その内譯を第 1 表～第 4 表に示す。

第 1 表 地區別・男女別・年令別調査兒數

	A 地 區			B 地 區			C 地 區			計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
1 年未滿	28	31	59	23	24	47	33	26	59	84	81	165
1 年以上 2 年未滿	30	20	50	13	16	29	22	29	51	65	65	130
計	58	51	109	36	40	76	55	55	110	149	146	295

第2表 出生順位別調査児数

	A 地 区			B 地 区			C 地 区			計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
第 1 子	12	11	23	17	14	31	21	18	39	50	43	93
2	19	14	33	8	9	17	15	14	29	42	37	79
3	15	16	31	4	6	10	7	12	19	26	34	60
4	7	5	12	1	7	8	9	4	13	17	16	33
5	2	3	5	3	1	4	—	3	3	5	7	12
6	1	1	2	2	2	4	2	1	3	5	4	9
7	2	1	3	—	—	—	—	1	1	2	2	4
8	—	—	—	1	—	1	—	—	—	1	—	1
9	—	—	—	—	1	1	—	1	1	—	2	2
不 明	—	—	—	—	—	—	1	1	2	1	1	2
計	58	51	109	36	40	76	55	55	110	149	146	295

第3表 調査児の家族の職業

	農 業	農商兼業	商 業	大 工 左 官	労務者 運轉手	公務員	教 員	鑛 山 業 クリーニング 自動車修理	不 明	計
A 地 区	102	0	3	0	0	2	1	0	1	109
B 地 区	46	2	2	3	5	11	4	3	0	76
C 地 区	106	0	0	0	4	0	0	0	0	110
計	254	2	5	3	9	13	5	3	1	295

第4表 調査児の家族の経済状態

	上	中	下	不 明	計
A 地 区	21	58	30	0	109
B 地 区	9	44	21	2	76
C 地 区	27	53	30	0	110
計	57	155	81	2	295

IV. エジコの使用状況——その1

宮崎町ではエジコのことを「エジッコ」、「イズコ」、「イツコ」といい、冬には藁製、夏には竹製のものを着る。この調査の結果では 295 調査数のうち 221 例がエジコを所有している。宮崎町では 1951 年以降乳幼児検診が行われ、エジコ使用を廃止しようとの指導の結果、エジコを所有しているが実際にエジコに入つた経験のある乳幼児は 154 例である（第5表参照）。次にエジコの使用状況を詳しく眺めてみる。

(1) 地 区 別 使 用 状 況

第5表によると、エジコ使用率、所有率、所有者の使用率のいずれに關しても、C地区＞A地区＞B地区という序列がある。山林畑作地帯のC地区では、A地区B地区に比較して都

第5表 地区別使用状況

	調査児数	エジコ 使用者数	エジコ使用率	エジコ 所有者数	エジコ 所有率	所有者の 使用率
A 地区	76	19	25.0 %	38	50.0 %	50.0 %
B 地区	109	49	44.9	81	74.3	65.5
C 地区	110	86	78.1	102	92.8	84.3
計	295	154	52.2	221	75.0	69.5

市文化との接触が少い。B地区は町の中心地であり、公務員、教員など都市で教育を受けた者、都市と接触のある商業者が住み、次三男の多くは都市に出て時折歸郷する。すなわち、都市文化との接触度に應じてエジコ使用状況に地域差が見られる。

(2) 調査児の家族の職業・母親の労働から見た使用状況

第6表 職業別エジコ所有状況

家の職業	農 業	農商兼業	商 業	公務員・教員	そ の 他	不 明	計
調査児数	254	2	5	18	15	1	295
エジコ所有者	209	2	—	4	6	—	221

第7表 エジコ使用者の家族の職業と母親の労働

家の職業 母親の労働	農 業	農商兼業	商 業	公務員・教員	そ の 他	不 明	計
農 業	144 (90)	1	—	1 (3)	1 (4)	—	147 (97)
商 業	—	(1)	(5)	—	—	—	(6)
家事	5 (12)	—	—	(10)	(9)	(1)	5 (32)
通勤	1	—	—	(4)	(1)	—	(5)
死亡	1 (1)	—	—	—	—	—	1
不明	1 (1)	—	—	—	—	—	1 (1)
計	151 (103)	1 (1)	(5)	1 (17)	1 (14)	(1)	154 (141)

() 内の数字はエジコ使用経族なき者

宮崎町全體のエジコ所有率は 75.0 % (第5表参照) であるが、調査児の家庭が農家である場合、254 人中 209 人 (82.3 %) がエジコを所有している。農家におけるエジコ使用率 (59.4 %)、エジコ所有者の使用率 (72.2 %) の両者も、宮崎町全體の平均を夫々上回っている (第6, 7表参照)。

全調査例中エジコに入つた子供は 154 例で、この 154 例 144 中例が農家で、しかも野良に出て働く母親をもつ子供であり、その他の 10 例について見ると、家の職業が農業であるか、農業以外の職業でも母が農業労働に従事している場合である。

(3) 祖母の在否、母親の年令と使用状況の關係

岩手縣江刺町梁川における調査で、近年エジコ使用が急減したのは、戦後若い者が村へ歸つてから、老人が農業から引退し子守をするようになったからだという説明が見られたが、宮崎町ではこれと對照的な調査結果がえられた。すなわち、エジコを所有している家に祖母 (調査児の祖母) がいる場合使用率 71.7 %, いない場合使用率 61.2 %で老人がいる場合

の方が使用率が高い。

さらに母親が30才以下の場合、使用率は54.1%、30才以上では45.5%である。宮崎町では家督権を引渡す時期は、孫が生れて2・3年たつてからが普通で、妻も夫と同時に主婦権を嫁に渡す。子供が生れても姑が強い権力をもっていて伝統的な育児様式を固執しようとし、若い母親は自分の意志の如何に拘らずエジコを使用させられているという場合も充分考えられる。

(4) 出生順位と使用状況の関係

宮崎町では第1子だけは大事に「手のうちで」育てても2・3番目となるとエジコに入れるということを聞いた。この調査では、第1子の使用率が49.3%、第1子以外の子供では53.8%でわずかながら第1子の使用率が低くなっている。

(5) 経済階層と使用状況の関係

第8表 経済階層と使用状況の関係

階 層	上	中	下
調 査 児 数	57 人	155 人	81 人
エジコ使用率	52.6 %	52.1 %	52.9 %
エジコ所有率	87.8 %	72.2 %	70.3 %
所有者の使用率	60.0 %	72.2 %	73.6 %

第8表によると経済階層によるエジコ使用率の差は見られないが、上層では所有率が高くその所有者の使用率は低い、下層では所有率は低いが所有者の使用率が高い。エジコ1個を作るには1,000圓前後の費用がいる。下層の家庭ではこの負擔は大きすぎるということもあり得る。これに對して、上層では實際使用しなくとも育児には支障がないが、子供が生れたからにはと立派なエジコを作る場合があつて第8表に見られるような傾向を生む一要因となつているかも知れない。

(6) 調査児の月令別に見た使用状況

第2圖 調査児の月令別エジコ使用率

第2圖に示されるように全體的には最近生れた子供において使用率減少の傾向が見られる。しかしエジコ使用は季節(冬は使用しても夏使用しないことがある、また農作業の忙しい時にのみ使用することもある)によ

り變化し、それと関連して出生月によつても使用率が變化するのではないかと考えられるが、それを確かめる手がかりがえられなかつた。

V. エジコの使用状況——その2

(1) エジコ使用期間

生後9日目にエジコに嬰兒を入れると泣かない子になるといういつたえが宮崎町にはあるが、現在は1ヶ月目に入れば始める場合が最も多く、ほとんどが4ヶ月以前に入れば始めている(第9表参照)。

第9表 エジコ使用の月令

月令	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
エジコ使用開始	28 19.9%	46 32.6%	26 18.6%	23 16.5%	10 7.1%	3 2.1%	3 2.1%		1 0.7%		
エジコ使用終了		6 4.9%	10 8.2%	13 10.7%	13 10.7%	13 10.7%	14 11.5%	6 4.9%	9 7.4%	7 5.8%	8 6.6%
月令	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計
エジコ使用開始			1 0.7%								141
エジコ使用終了	5 4.1%	10 8.2%	1 0.8%	3 2.4%		1 0.8%	2 1.6%			1 0.8%	122

使用期間は平均5.5ヶ月で一體に入ればはじめの早いものほど使用期間が長い。(第3圖参照平均)。使用期間についてもC地區5.9ヶ月、A地區5.4ヶ月、B地區3.7ヶ月で地域差が見られる。

(2) エジコ使用の方法

エジコに子供をどのようにして入れるかについては次の4つの型がある。P型：籠の

第3圖 エジコ使用始の月令と平均使用月数

中に藁を敷き灰を入れて、さらに藁をおき、いぐさを束ねて敷く。その上におむつをあてない子供をのせ、體の周圍に「ドヤ」と稱して古い着物をまいて温くし安定させる。子供の尿はいぐ

さを通つて灰に浸み込み、この灰は畝に棄てられる。この型が古くからの入れ方である。

Q型： P型と同じ順序だが、たゞ子供におむつをあてゝ入れる。

R型： Q型のようにしておむつをあてる場合、さらにゴム又はビニールのおむつカバーを用いるこの型ではおむつカバーを用いるから灰を入れる必要はないのであるが、R型47例中 11 例が灰を入れて使用している。

S型： 空のエジコにつたい歩きの子供を身ごしらえして入れておく。

第10表 地 区 別 エ ジ コ 使 用 方 法

入 れ 方	B 地 区		A 地 区		C 地 区	
	實數	%	實數	%	實數	%
P 型 (わら+ドヤ)	0	0	2	4.5	3	3.6
Q 型 (わら+ドヤ+おむつ)	11	57.7	26	57.8	53	64.1
R型 (わら+ドヤ+おむつ+カバー) S型	8	42.1	17	37.8	27	32.2
計	19	100	45	100	83	100

各型の使用頻度(第10表)を地区別に見ると、最も新しいR型及びS型はB地区に高く、カバーを用いないQ型はC地区に高くなつてゐる。

第11表 経 済 階 層 別 エ ジ コ 使 用 方 法

入 れ 方	上		中		下	
	實數	%	實數	%	實數	%
P 型	2	6.7	2	2.6	1	2.6
Q 型	17	56.6	49	64.3	23	58.9
R 型 + S 型	11	36.7	26	33.2	15	38.4
計	30	100	77	100	35	100

エジコ使用方法の型は、第11表によると、各経済階層を通じ同様な分布を示している。

(3) 1日のエジコ使用時間

1日のエジコ使用時間についての集計はできなかつたが、母親が野良に出る午前7時乃至8時から野良から歸る午後5時乃至6時まで使用する者が最も多い。この間、午前10時頃、晝食時等に母親が家に歸つて來る時は子供はエジコから出されることもある。

IV, V に述べた宮崎町のエジコ使用状況では、地区別の差異の方が経済階層間に見られる差異より大きいといえよう。すなわち町内でエジコ使用率の最も高い山林畑作地帯のC地では使用期間も長く、使用方法にも古い型が多い。これに對して使用率の低い町の中心B地区では使用期間も短く、使用方法にも新しい型が多く見られる。また新しい型を採用している場合、1日のエジコ使用時間も減少する傾向がある。

VI. エジコの使用と育児の分担

育児の分担を第12表の如くエジコ使用群と非使用群に分けて見ると、夜ねる時、おむつの世話、食事の世話に關して、エジコに入る子供は入らない子供より母親の世話をうける割合が小さい。エジコ使用群では祖母が食事の世話はしてくれるがおむつの世話は母が野良から歸つて來てするという例が數例ある。

第12表 育 児 の 分 担

主な育児擔當者		母		祖 母		祖 父		父		そ の 他		計	
		實數	%	實數	%	實數	%	實數	%	實數	%	實數	%
エジコ使用群	夜 ね る 時	144	96.6	4	2.7	1	0.7	—	—	—	—	149	100
	おむつの世話	74	48.9	64	42.2	2	1.3	—	—	12	7.9	152	100
	食 物 の 世 話	64	42.1	74	48.4	1	0.7	—	—	14	9.0	153	100
	入 浴 の 世 話	35	35.8	31	31.6	7	7.1	20	205	5	5.1	98	100
エジコ非使用群	夜 ね る 時	134	97.7	—	—	—	—	3	2.3	—	—	137	100
	おむつの世話	75	53.4	61	43.2	—	—	—	—	5	3.6	141	100
	食 物 の 世 話	89	63.5	45	32.1	—	—	—	—	6	4.3	140	100
	入 浴 の 世 話	21	23.6	38	42.8	3	3.4	23	25.7	4	4.5	89	100

おむつの世話に関連して、エジコに入れられる子供はそのまま放任されていることが多いからであろうか、かゝえはじめの月令がエジコ使用群では平均 10.3 ヶ月、非使用群では 9.6 ヶ月となつている。さらに、完全におむつを使用しなくなつた子供について使用しなくなつた時の平均月令がエジコ使用群で 20.3 ヶ月、非使用群では 18.7 ヶ月といういちぶるしい差がみとめられる。

入浴に関しては、エジコ非使用群において母親以外の家族の關與が使用群より大きくなつていることも興味ある點である。

夜、自分 1 人のふとんで寝ている子供は、エジコ使用群 149 人中 2 人であるのに對し非使用群 137 人中 25 人である。しかも兩者を通じて母の年令が 30 才以下の場合 1 人寝をさせる傾向が 30 才以上の場合より多い。

以上の如く、育児の分担者その他の個々の育児方法を含めた育児様式がエジコ使用群と非使用群の間で可なり異つている。これは前に述べたエジコ使用状況の地域差とも関連し、宮崎町の經濟的文化的構造を背景としているものと考えられる。

VII. 結 語

エジコ使用育児様式はその分布をもたらしした歴史的條件、使用を維持したエコロジカルな條件の上に立つて存在して來たが、分布を示す東北日本で時間的な差異はあれ一般的に減少・消滅しつつある。筆者が地域において調査した結果では、その要因として新しい文化との接觸による育児の態度の變化が最も大きいと思われる。減少の過程としては使用期間・1 日の使用時間の短縮・使用方法の變化が見られた。現在の使用状況は母親の家族内における地位・労働の状態とも関連し、手をかけずに子供を安全にしておけること及び暖房設備の充分でない農家における保温がエジコの利點とされている。

エジコ使用を放棄した場合、それに代るものとしてハンモックを使用している例もあるが、その他の具體的な育児方法の變化については調査していない。

エジコの使用それ自體と共に、それに伴う育児様式全般が子供のパーソナリティ形成にどのような影響力をもつものであるかの研究が今後の問題であり目下調査を試みつつあるが、これについては又稿を改めて報告したい。

註

- (1) 宮城縣公衆衛生課發行『東北乳幼児の實態』第 1～7 報 1950～56.
- (2) 1954 年 5 月第 7 回日本小兒科學會總會における座談會「クル病について」(司會者佐野保)『小兒科診療』17 卷 10 號 pp. 917～927.
- (3) 宮崎町發行『宮崎町々勢概要』1957 年 9 月
- (4) 宮崎岩出山保健所：『いづことくる病について (宮崎町)』1955 年、調査兒の家庭の經濟狀態はそれぞれの地區の事情に詳しい助産婦、役場吏員の方々の判定により生活水準を上中下に區分した。その基準は、農家の場合、所有耕地 2 町以上を上、5 反以上 2 町未満を中、5 反以下を下とし、農家以外の家庭に關しては、上中下各層の農家收入に準じて判定が下されている。
- (5) 祖父江孝男、須江ひろ子、村上泰治：「エジコの文化人類學的研究：分布と地域的變異について」(『人類學雜誌』Vol. 66, No. 2, 1958)

(東京大學教養學部文化人類學研究室)

Anthropological Study of *Ejiko* (Cradle)

Intensive Study of an *Ejiko*-Using Community in Miyagi Prefecture

HIROKO SUE

The *ejiko* (Japanese cradle made of straw etc.) has been widely used among the rural villages in the Northeastern part of Japan as discussed in detail by Sofue in his recent article (*Jinruigaku Zasshi* Vol. 66, No. 2, 1958). In many districts, however, this *ejiko* is gradually disappearing. According to the author's intensive field research in Miyazaki-machi*, Miyagi Prefecture (1957), in addition to her previous studies in Kaida-mura, Nagano Prefecture (1955, 56) and in Esashi-machi, Iwate Prefecture (1957), this disappearance is mainly caused by the recent rapid change in the people's attitude toward child-training and in their medical knowledge. In/the course of the disappearance, the length of *ejiko*-using terms for a child is gradually being shortened and the way of using *ejiko* is changed, too.

In Miyazaki-machi, the ratio of the children who are put in the *ejiko* is 25.0 % in the semi-agricultural area, 44.9 % in the paddy-field area and 78.1 % in the mountain-dry-field area. This indicates that the people use *ejiko* less often, the more they are urbanized. 144/out of 154 children who were raised in/the *ejiko* were born in farming families and their mothers worked in the field. The status of the mothers seems to have some correlation with the maintenance of the *ejiko*-using habit.

Children, put into *ejiko*, can be kept warm even in their poorly heated houses, and kept safe in the absence of direct care of the adults. However, their physical exercise is largely restricted and their diapers are seldom changed. They are less often taken care of by their own mothers than the children raised without the *ejiko*.

*In this community, the author interviewed 295 mothers of 0—1 year old children.